特別支援教育の扉 №１９４　　令和８年８月21日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

「夏休み園訪問　パート1」

来年度の就学先に悩んでいる保護者の同意を得て、今後の就学相談を進める際の参考にするため、各園を訪問してお子さんの様子を参観しました。今号では、園訪問を通して感じたことを紹介します。

１　子どもの見方・捉え方

支援対象児を紹介する際、「○○ができない」など、その子の課題の報告が多くなる。子どもを早く変えたいという気持ちの表れであり、子どもとの関係が悪化することもある。

ある園では課題だけでなく、子どものいいところも紹介していた。子どもの行動を問題行動ではなく、成長するための必要行動として捉えている。多様な視点から、共感的な見方をすることが大切である。子どもの見方を変えると、支援が変わり、良好な関係を築くこともできる。

子どもにとって一番辛いことは、「みんなができることができないこと」ではなく、「できない苦しい気持ちを分かってもらえないこと」である。子どもの心に寄り添い、子どものいいところをすぐ言える指導者でありたいと感じた。

２　視覚支援や子どもがやってみたい活動があると順番を待てる

ある園では、４歳児クラスと５歳児クラスの子どもたちが一緒に長縄跳びで遊んでいた。次の人が跳ぶ待機場所に丸いマークがあり、先生の指示がなくても、それを目印にみんな一列に並んで自分の順番が来るまで待つことができていた。

別の園では、５歳児クラスが店員となり、そこへ４歳児クラスの子どもたちがお客さんとして入ってきた。人気のある食べ物屋さんの前には長蛇の列。しかし、子どもたちはチケットを握りしめ、少し時間がかかっても順番を待つことができていた。

ルールは見えないが、並んで待つことは、自分の順番が見えるのでワクワクしながら我慢できる。ルールを守る力を育む最初の一歩は、順番を守ることだと感じた。

３　着替え中は見ないでね

子どもにとってプールは、夏の楽しい活動の一つである。各園では男女が別々の部屋に分かれたり、見られないように衝立を活用したりして着替えをしていた。また、体をすっぽり隠せる巻きタオルを使って着替えをする園もあった。更に、着替え後、部屋で入念に準備体操をしてからプールに向かっていた。

着替えは、他者から見て自分がどのような姿をしているか想像することで、恥ずかしい気持ちを感じる。子どもが何を恥ずかしいと感じるかは、周りの大人の価値観と経験が影響する。小さい頃から、ルールとして所作を指導することは大切であると感じた。



とれたて直送便





【就学を前に指導したい３つの視点】

①日常生活：挨拶や返事、着替え、排泄、食事、後片付け等が一人でできる。
②集団適応：時間の流れに沿って、友達と一緒にルールを守って楽しく行動できる。
③学習意欲：「知りたい、うまくなりたい」という意欲をもち、好きなことに挑戦できる。

学びの場を選ぶことに、合格・不合格はない。初めての学校生活を笑顔で楽しく送れるように、無理をさせるよりも、その子どもに合った学習環境を考えることが大切です。